

研究通信

No. 26

1952年5月刊

村落研究会事務局

東京都町部
法政大学社会学部
研究室 内

昨年の大会と本年の大会

(東京) 福 武 直

村研の昨年度の大会は、研究会始まって以来、完全に独立して開くことができた最初の大会であった。それにもかかわらず、多数の参加者を経て盛会であったことは、開催の世話役の一端をになつたものにとつて大変うれしかった。とくに第二日の特別報告とそれにもとづく討論は、熱もこもつたし、有益でもあつたと思う。こうした雰囲気をつもつづけてゆきたいと願うのは、会員みんなの気持ちであらう。

しかし、そうであるだけに、何だか少し物足りない気分が残つたことも、おそらく多くの人にとつて事実であつたと思われる。それは、やはり時間の制約では討論がとことんまでおし進められなかつたからである。もともと昨年度大会は、愛知県のごとく泊りこみゆつくり懇談をかさねながら、討論しようという計画であつた。それが東京に変更されたわけであるが、東京でやるにしても、参加者全員の宿泊が検討された。けれども、時期が連休にあつてあり、どうにも宿泊の場所がえられなかつたのである。そのために、最初の計画で考えられたほどの時間がとれず、若干の物足りなさが感じられたのではないであらうか。

こうした経過を鑑みて、本年は、思いきつて宿泊を敷て試みたい

と考へる。その予定地は、鹿見島の民のまじであるが、鹿見島の悪い場所を改良をめぐり問題を論ずるのまじであるが、東北大学の学生が活躍して、秋にぜひとも実行することにした。西の方の会員には、少々お気の毒であるが、宿泊費が安くつくわけだから、東京まで御足労願うのと大して違ひはないであらう。温泉に付きながら、報告会での議論を延長させて話の花を咲かせ、お互に標になつて親交を深くするのにも、非常によいことではないだらうか。これまで会を重ねながら、お互にゆつくり話しあへなかつたららみを、本年の大会では一挙にとりもどしたいと思ふのである。

鹿見島にて

村落共同体と政治権力

(東京) 松 原 治 郎

先生、東京を発つてから二週間、そろそろ今回の旅も終りに近づいてまいりました。というよりは、日曜より先にフットコロの方が切れてしまいました。とむをえねといつた現状です。先生を通じて今度の調査の依頼があつた時には、まさかこれほど大なる計画のものとは予想もしてありませんでしたし、ザックパランな話、これほど切りつめられた費用の枠内でその仕事をすることも知りませんでした。今となつては、何か先生がうらめしくなりました。このぶんではどうしても足がでそです。どうも大変失礼しました。今日は先生におうらみごとを申上げようと思つてお手紙をしたわけではありませんが、それよりは鹿見島のように、われわれにとつては、かなり僻地の地、しかも県内を広く知る機会を免れてしまつたお礼と、日々を通してきました、その機会を与えて下さりましたお礼と、中間報告のつもりでございます。

先生もごんじのうちに、今度の調査の目的は、昭和二十七年から実施している経済自立化運動の推進のため、部落復興と部落内諸集団の発展と、とくに部落の発展に留意されてとらえることとで、その発展の目的のためにも、山と入ると鹿見島で討論されたことと、県内を広く知る機会がかりました。そこで、県を東西に二分し、且岩が西側を担つて、北の川内流城と南の薩摩

半島を、小生が東側の北鄙伊佐盆地と南部の大隈半島方面を歩きました。結局四カ市町村八カ部落でしたが、その間自動車で通過したところをおわせますとかなり広い見聞ができました。そこでいろいろ驚きましたことは、第一に生産力の等しい停滞性で、颱風の表録座であり、シラス、ボラ、ヨラ、火山灰土等の火山噴出物ではとんど覆われた段丘や、雑竹林その他雑木林の山に寸断された姿は、鹿児島に調査がはじめてではない小生にも、あらためて強烈な印象を与えました。そして耕地の零細性としかも畑（落穀・甘藷中心）のウエイトの高さを痛切に知らされました。そうしたことも、もっと小生の驚きは、われわれの研究分野内のことでした。その強烈な印象はまだ充分に頭の中で整理しきれませんが、思いつくままに述べてみます。

1. まず合併以前の行政町村の規模がきわめて大きいことで、面積からいっても、人口からいっても驚くばかりでした。この県では合併促進といっても、すでに適正規模を越える町村も多いようです。一村内に、しかも、一〇〇―一三〇の部落が散在し、一部落三〇戸前後、役場自身が全部を正確に把握しがない現状です。

生化をはじめ、したがって政治のみならず経済上の支配体制を強化してまいりました。

2. 次に部落を見ますと、たしかに部落共同体の存立条件が豊潤で、部落有林、採草地はもとより、部落が耕地もしくは宅地を共有して部落民に貸与、小作料をとるなど、その点では生活上に部落のもつウエイトはかなり大きいと思われました。

4. そして、まとまりのよい部落―経済自立化運動で果の一種変形をうけたような模範部落―というのは、4日〇や官農グループなどの機能集団が、部落共同体の枠内にガッチリつかまれている部落で、たとえば、こうしたグループが共同地を借入して研究の場とするなどにみられます。また製茶グループの敷人が、結局すべて部落有の製茶工場に出すことによつて、利潤を部落に收上げられているといつたばあひもそれだといえましょう。

5. またはつきり、築垣面接自計による調査票の結果をよく整理してはみませんが、簡単なソシオグラムを作ってみると、いわゆるまとまりのよい部落では、リーダーの横出がきわめて顕著に出来ますし、ユイのソシオグラムでも、一部落連続的で、しかも外に手が伸びていないなど、非常に凝がはつきりしているようです。

6. ところが、ここまででは問題なかつたのですが、次の部落とは何かの問題のとをるで壁につきあたってしまった。というのは、私どもが普通部落の機能というばあひ、自治機構としての部落（いわゆる近代や近現代に代表される）と、行政の組織機構としての部

落（現在、駐在員もしくは生産組合長ならびに班長に代表される）の二面を想定し、前者に藩政期からの共同体機構をみるのですが、ここでは、まるっきりその形成概念では入ってゆけなかつたことです。この人が、現在行政の末梢で連絡や指導の受け手になっている機構（昭和二十七年以降、県下一律に振興小組合となった）と区別して、自治機構だと概念している部落というのは、どう尋ねていってもとどのつまりは農事小組合でしかないことでした。それこそすなわち明治二七―二九年に果が強力な指導の下に形成せしめた「農事小組合」であり、その後加納知事の勸効小組合として強化されたものにはかならないようです。ある部落では「部落の沿革」として最初「一、明治二十七年四月部落創立」と記したパンフレットをくれました。果設備ですこし調べてみたのですが、小組合の設立としては鹿児島は千葉とならんで全国でもっとも早く、「本県農事小組合ハ明治二八年以前ヨリ組織セラレ、相当ノ活動ヲナシツアリ。即チ隣接セル二十戸乃至五十戸ノ集團セル農家ヲ以テ準式組合ノ如キモノヲ農家任意ニ組織シテ、相互扶助的ノ活動ヲナシタルガ、日清戦争終結後軍隊ノ凱旋ト同時ニ農民一般ハ戦勝気分ニ浸リ、稍々モスレバ其生業ヲ怠ルノ兆アリシヲ以テ、時ノ知事加納久宣氏ハ大イニ之ヲ援シ、戦時ニ於ケル將兵ノ緊張セル精神内面的ノ鬱苦統制アル訓練其益ヲ農村ニ植付クル事ハ県下農業の改良ニ偉大ナル効果ヲ納ムルトナシ二九年ヨリ都市町村長ト相謀リ小組合ノ設立訓練ニ全力ヲ挙ガカマセリ」

小組合ノ設立訓練ニ全力ヲ挙ガカマセリ」

「農事小組合ノ沿革及指導奨励」といふ
其合です。この小組合の指導奨励事項をみま
すと、「教育勸誘成申詔書ノ趣旨ヲ奉戴シ組
合員一致協同ニ農事ノ改良実行ヲ期シ農家ノ
経済向上ヲ計リ自治ノ開発ニ努メ以テ報効ノ
実ヲ擧ゲルヲ目的トスル所本ニシテ」に於り「
共同一致心ノ養成」として「共同耕作・共同造林
・共同請負共同田植・共同貯金」等々種かく
奨励を定めその他に九項目（夫々に細目五
六）の龐大なものとなつています。それを部
落の備からみますと、共同造林・共同耕作・
共同製茶・台所改善などまったく忠実に明治
・大正期を送つてゐる事実が指摘できます。
そして、こうしていつのまにか、小組合がか
れらの部落となり、自治機構となつてきた過
程が実にきれいに確認できます。戦後の段階
で、この共有財産を個人分割してしまつた例
が方々にみられますが、そういう部落がいわ
ゆるまとまりのわるい部落のようです。

7. この意味にはひとつ藩政期における部
落存立の不明確さがあるのではないかと想ひ
ます。というのは、郷を中心とする外城制度
と、反面買租負担の単位たる門（カド）との
関係で、大体現在の一部落は三〜四門が今日
にいたつたものが多く、その門の分裂・拡大
が門中心の結合の諸慣行をとどめていたのは
明治二十年代までで、農民の把握のためにも
小組合の必要があつたと思ひます。同時にま
た西南戦役によつて失つた藩庫の地位の再編
強化のためにも、さらに日清戦後のいわゆる
「戦後経営」期の権力拡充のためにも、これ
がなされた意味がわかりそうです。さらに、

時期的にフット郷士の寄生化の段階でもあり、
それとの関連も考へるべきことと思ひます。
以上とりとめなく書きましたがいずれもま
かく御報告申し上げようと思つております。た
だ、前に長野の村を調べたときの階級意識の
あらわれてくる大正デモクラシー段階で、農
村から「國民精神作興ニ範スル奨励」を手が
かりに、共同体の再編強化がなされたばあい
を想ひおこし、とくに明治以降の村落共同体
は、政治権力との関連を無視しては考へられ
ないことを感じましたので一筆致しました。
まもなく帰京致します。いすれ拜領の上。

基本概念の検討

（島根） 山岡 榮 市

行望久しかつた鈴木栄太郎氏の「都市社会
学原理」が公刊されたので、ざつと目を通さ
せて頂いた。いろいろと示唆を受けるところ
があつたが、「都市に關する病態や政策や理
根に触れるのは、社会学の本来的な研究では
ない」とし、社会学はその常態の研究即ち氏
のいわゆる「都市の正常人口の正常生活」の
研究であるべきこと、及び「都市をして都市
たらしむるものは、社会的交流の結節的機關
がそこに所在してゐる点にある」とされる二
点に、私自身は最大の御教示を受けた。長き
にわたる実証的研究と理論的精練を経て、こ
うに到達された先学の学問的情熱に対し、ま
ことに心打たれるものがあつた。

さて、われわれは農村や漁村の調査を行う
に當り、その病態や異常態に感觸されて、そ
の病態の究明を任務しなかつたであらうか。

異常態は、ある意味に於て、社会の運動の
を示すものであり、それに着目することはと
くに今日必要ではあるが、そのことのために
異常態を支配してゐる正常態の究明を怠りし
はならないと思ふ。譬へば、漁村に於ても、
社会、経済的諸条件の変化に感ぜ、階級化
の傾向が進行すれば、漸次、農村約或は都市
的要素を強めてくるが、しかも尚依然として
漁村としての基本的性格を強く残してゐる。
いわゆる「漁村としての基本的性格」とは何
であるか。「漁村をして漁村たらしめるもの
」は何であるか。その上を「漁村の常態に
おける本質」といつたものが、実証理論的
に明らかになつてゐるとはいえないようである。
「漁業を主たる生業とする聚落」などとい
つても問題はいさしも解決されないであらう。

農村についても同じことがいえるのではある
まいか。村落は、このような基本的な概念に
ついていしかも実証的調査に依拠し乍ら一
えす論究してゆく場をなければならぬと思
われる。私は、いろいろな事情のため、今ま
でに一度しか参加してゐないので、いふべき
資格を持たないのであるが、これらの点につ
いて先学諸賢の御教示を得たいと思ふ。昨年
度は「村落共同体」のテーマが掲げられて
ゐる由であるが大塚氏の「共同体の基礎理論」を
始め経済史学や歴史学におけるそれとの比較
検討に於て、社会学の共同理論が明確に
されることを期待したいと思ふ。鈴木氏の著
書によつて示唆を受けた現在の感觸の一端を
のべて、編集者への責をよすがせて頂いた次第
である。（一九五八・一・三一）

今秋大会計画並びに報告者公募

(宿務委員会)

来る一九五八年度大会は総会での相談にもとづき次の如く決定しました。岩手県鳴子温泉にある「農民の家」において、九月下旬ないし十月上旬(農繁期で同所が空いている時期)に、二泊二日合宿して行方。但し、一日目は、登壇後に全員御着ということになると思われ、その晩一泊して、翌日の丸一月を研究発表と討議にあてるのも一案。到着早々やる場合は午後の教時間のみを、これに加えて一日半となる。但し第二日目はおそくなるからもう一泊して翌朝引上げるといふ計画である。

共同課題「村落共同体」

今度は自由課題を別に組まない。右の共同課題を取上げた目的は、先に年報「村落共同体の構造分析」を出したが、それは大会での発表及び討議を行った結果ではなかったから、今度は大会で、この問題を追求することに、なお多岐的であいまいたこの概念を明らかにすることにある。但し、村落共同体の概念だけを抽象的に扱うことは行わないで、現実の共同体の具体的な数例の中で、そのこわれた、或はこのりかたの分析を通じて、村落共同体とは何かという問題を考えることにする。

以上の計画にもとづき、共同課題についての研究報告者を公募致します。何卒、ふるって御申込み給りますよう。申込みの切りは五月末まで。東京都文京区大塚強町、東京教

育大学文学部社会学研究室宛付、村研課題委員会宛のこと。発表題目はさしあたり仮題にても支障ありません。一、二行、調査対象地域名等発表内容に關するメモを付して下さることができればなお結構です。

年報V編集計画(年報委員会)

(仮題)戦後の農村

- 一、(東京近郊村の家族) 小山 隆
- 二、(東北の家族) 竹内利美
- 三、(東北の村落) 安孫子麟
- 四、(愛知の村落) 後藤和夫
- 以上 四百字詰六〇枚ずつ
- 五、農家の兼業化 常盤辰治
- 六、農民の価値観 川越淳二
- 七、戦後の一定置網漁村 中野 卓
- 以上 四百字詰四〇枚ずつ
- 八、総括討論にもとづく契約(担当者未定)
- 九、農政の変化(特別資料) 小倉武一
- 以上 四百字詰三〇枚程度
- 十、研究動向

民族学 平山敏次郎

経済学 藤峻衆三

地理学 (東大地理学教室の誰か)

法社会学 大島太郎

歴史学 金子 円(交渉中)

社会学 中島龍太郎(交渉中)

年報IV「農村過剰人口の存在形態」について

去秋の総会席上、各研究機関単位にて御申込みいただきました年報IVについて、時潮社

に聞きましたところ、同社にては、皆様に對して押付けがましかつたのではないかという配慮から、あの時、お申込み給わつた方々にも場所により再び御問合せしなほして、改めて御申込みのあつた方面のみにお送りしたとのことでした。すでに入手された方が多いかと存じますが未だの方々は年報刊行支持のため御協力給わりますようお願ひ致します(年報委員会)

年報委員会、兼、課題委員会記事

二月十三日、東京本郷に於て該大委員会が開かれ、去秋総会における討議の結果に基き、別掲の如く、年報編集、及び今秋大会の計画が立てられた。当日出席者、有賀喜左衛門、小池甚之、福武直、森岡清美、島崎裕、北川隆吉、松原治郎、中野卓の八名であつた。(中野卓記)

会員名簿訂正

昭和三十三年十月一日現在の名簿に左の会員が抜けておりました。お詫び申上ります。

青井 和夫 東京学芸大学

横浜市港北区大倉根町五五〇

安孫子麟 東北大学農学研究所

全 所 内

オ大内 義明 時潮社

東京都文京区向ヶ丘遊生町

藤原武夫 東洋大学

東京都板橋区志村中台町三七七

左の諸氏については一部記載事項を修正致します。

イ伊藤 豊川省農業技術研究所

東京都北区西ヶ原二ノ一(伸張は)

サ齊藤 李 日本三育学院

千葉県君津郡袖ヶ浦 日本三育学院内

シ執行 恩 奈良女子大学

奈良市 全大学内

夕田原音和 東北大学文学部

仙台市盛嵐下一二〇 本間方

フ藤木三千人 東北大学教育学部

仙台市東北大学教育社会学研究部

◎住所 変更

ス菅野 俊作

仙台市宮沢町東北大学富沢分夜

夕竹内利典

仙台市外記通立〇一東北大学宿舎三三

ニ西川 善介

東京都立区西新井三九一不備尾一九七七

マ松原 治郎

東京都世田谷区砧町一三〇一三三三

人村長利根朗

仙台市片平町東北大学経済学部

◎新入 会 員

勝又 猛 東北大学教育学部

仙台市片平町七五

鈴木 広 東北大学文学部大学院

仙台市片平町十二 安藤方

新保 廣 東京教育大学大学院

三鷹市深大寺三八三一

根岸 義夫 国際基督教大学農林工学部

三鷹市大沢一五〇〇

富川 盛道 北海道大学文学部

札幌市北八条西三丁目北大社会学部研究部

上子 武次 大阪府立大学文学部

京都府宇治市五ヶ庄

園田 泰一 東京大学文学部

東京都世田谷区成城町九〇(調停)八九六六

酒井 俊二 東洋大学

東京都中野区沼袋町五一

河村 望 東京都立大学人文学部

東京都品川区大井町二二三五第百賢荘

杉山 重 長野県西筑摩郡日義中学校

東京都調布市金子一五二〇 松平方

中川 喜代子 大阪市立大学文学部

大阪市東住吉区田辺東之町二の五 国友方

布施 英治 北海道大学文学部

札幌市北八条西三丁目北大社会学部研究部

◎告 知

◎会費について

(1)昭和三二年度会費

昭和三二年度会費は大会当日出席された会

員七三名の方々に納入して頂きましたが(

芳名省略)当日出席されなかつた方々(約百

名)はあついでの間、なるべく現金で納付さ

して頂戴し、事務局へ納入下さるようお願い

致します。(三百円)

(2)昭和三三年度会費

事務局所持の現金が最少ですので、前年度

分同様、早目に御力をお願い致します。

(3)三三年度会費納入者(三、一〇現在)

小林 茂・小川 徹・八木 佐市・後藤 和夫・牧

野 自朗・川 越 洋二。

◎新入 会 員

第五回大会共同討議記録を四月下旬に刊

行する予定です。今回は、時間と経費の節約の

意味で、当日発言された方々に原稿をお願いし

てまいり、当日発言された方々に原稿をお願いし

たいと思ひます。事務局に御一任下さい。

◎おわびとお願ひ

(1)昭和三二年度会計報告は大会当日出席さ

れた方にはプリントで報告しましたが、欠席

された方々のために本号で再報告する予定で

ありましたところ、事務担当者の不手際から

間に合せることができませんでした。次号で

報告するつもりです。お詫言下承下下さい。

(2)通信用原稿を郵便でお願いしても、お

送り頂けません。何分中途半端な地方都市ゆ

え、出向いてお願いすることも出来ず困って

おります。お多忙とは存じますが、何卒御流

力の程をお願い致します。

(3)会員の研究状況アンケートはその後到着

致しておりません。近日中にあらためて御案

内致しますが、その節はよろしくお願ひ致し

ます。新入会員の方は自己紹介の意味もあり

ますので必ずお寄せ下さい。またその後住所

勤務先を変更された方は御連絡下さい。改訂

したものを御出したいと思ひますので。

(4)本年度事務局は、愛知大学文学部社会学

研究室(豊橋市町畑町)・愛知学芸大学法経

社教室(岡崎市明大寺町)でお引受けしまし

たが、事務局に関する御連絡は便宜上、愛知

大学にお願ひ致します。

なお年報および宿題委員会への御連絡は従

前通り、東京教育大学社会学研究部宛付(東

京都文京区大塚通町二四)にお願ひ致します。

(事務局)

昭和32年度大会決算報告

収 入		支 出	
大会費(事務局負担)	6,000	学生アルバイト	1,800
会場費	3,000	会場費	1,465
雑費	3,000	録音テープ代	3,780
参加費	3,500	懇親会費	15,446
懇親会費	12,100	雑費	40
差引	1,131		
	22,731		22,731

事務局を引受けて

K—兄 早い所はもう後の季節になりました。去秋東京の大会でお会いしてから、少し分御無沙汰しましたが、お元気ですか。半兄もまた多くの村研究会諸氏も新年度の研究計画を構えて居られることと思えます。

さて、今回はからず事務局を引受けることになりました。一年毎の持廻りと決まっています以上、何時かは引受けなければならぬし、「どうせ引受けざるならあまり大きくならないうちに」などとけしからん考えから、G兄ともどもお引受けし決意です。ところが会員は既に二百名近く、かなりの大掛りで集費を費くだけでも大変なのに今更ながら驚いている始末です。それに東京、仙台、大阪などとは違って地方の何となく大学では人手も不足で思ったことも想像もさせません。その上不馴れに怠惰という体面があるのだから、一層困ったものです。しかし、いままでの事務局の方々や、東京の委員会の方々の御指導や御鞭撻を得て、何とかやってみようと、この頃になって決心した次第です。

当面考えていることは、

- (1) 通信を出来るだけ益かな内容で、隔月刊したい。次回は大会記事特別号を四月、二七号を五月に予定しています。そのためには原稿が充分なければなりません。半兄はじめ会員諸氏の御投稿を切にお願いいたします。
- (2) 名簿やその他、必要書類の面を出来るだけ整備しておこうと思えます。それから財政

面を豊かにしたいと企圖しています。いすれもむずかしい仕事ですが、これも学会の基礎を固めるために重要なことですので、何卒御協力下さい。

以上、言いわけやら何やら分らないことを書きましたが、御了承下さい。

半兄はじめ会員諸氏の御研鑽を本望しします。

(川越記)

研究通信原稿を!!!

感想・要求・研究ノート・討論・啓蒙・提案、何でも結構です。枚数は制限しませんが二百字五枚から十枚程度を歓迎します。

補切は
二七号(五月刊) 四月二十日
二八号(七月刊) 六月二十日
送先
豊橋市町畑町愛知大学内村研究室
事務局宛

